

日本の社会学における中国研究——その 130 年を回顧する

園田 茂人(東京大学東洋文化研究所)

(1) 洋学としての社会学:1890年代～1920年代

- ・社会学の輸入:フェノロサ(1853-1908)と外山正一(1848-1900)
- ・陽明学の伝統から社会学へ:建部遯吾(1871-1945)という規格外の人物
- ・日本を通じた社会学的知識の流通:留学生を通じた情報の流れにみる盛衰(星, 2015)
／中国社会学草創期における康宝忠(1884-1919:早稲田大学経済学科)や陶孟和(1887-1960:東京高等師範学校、LSE)ら留日組の活躍
／「遅れた(つつある)」中国への部分的関心
／本格的社会的科学研究の対象外



康宝忠 (1884-1919)



陶孟和 (1887-1960)

(2) 社会学のローカル化・実証化の中の「中国」:1920年代～40年代

- ・輸入から自己生産へ:日本と中国における社会学のローカル化と実証研究の隆盛(園田, 1993)
- ・戦中の動員体制下における中国社会学研究「バブル」:林 恵海(1895-1985)、福武 直(1917-1989)、尾高邦雄(1908-1993)のモノグラフがもつ歴史的意味



福武 直 (1917-1989)



尾高邦雄 (1908-1993)

「さて、応召した年(1941年:注)の秋、陸軍病院を退院して、同時に召集解除になりましたが、そのころから、学問論や方法論にはあきあきして、実証研究がやりたくなりました。ちょうどそのころ、海軍から声がかかって、中国南端の陸上にある海南島という島で民族学的調査をやる

ことになったのです…一ヶ月ほど原住民(黎族のこと:注)の生活実態の調査をやっていましたが、わたくしにとってこれは、それまででいちばんおもしろい時期のひとつでした」(尾高, 1995:9-10)

「(卒業:注)論文もすまして肩の荷をひとまずおろしたこと、何とか父の厄介にならなくてもすみそうな話がもちあがった。(1939年)十二月下旬、私は今井さん(今井時郎:注)と林さん(林恵海:注)が興亜院依嘱の中国農村調査をひきうけるので、四月からその研究助手として手伝わないかという誘いをうけたのである。助手として手伝えば、調査出張旅費から手当を捻出してやろうということであった。この話が、私の研究生活の方向を決定することになった。自分できめた研究ではなく、手当をもらえるということで農村の研究に入ることになったのであるから、その点では随分便宜的なことだといわざるをえない。しかし、私は、この誘いをうけるからには、単に手伝うだけでなく、自分としても、やれるだけやってみようと思った」(福武, 1976:43)

- ・文献学的中国研究の発展: 牧野 巽(1905-1974)と清水盛光(1904-1999)の家族・宗族研究
／多様な方法、多様な中国像: 実証研究の百花繚乱



牧野 巽(1905-1974) 清水盛光(1904-1999)

- ・福武直の中国農村社会論(今井, 2015): その後の自身の研究との継続性／断続性が示唆するもの

(3) 「中国忘却」の時代としての戦後: 1940年代～70年代

- ・日本における実践課題としての民主化(福武, 1976)
- ・中国における社会学の禁止と台湾・香港における継承・発展: 日本の社会学史に「中国」は存在しない?(新明, 1954; 富永, 2004)
- ・冷戦体制下の中国への地域研究的関心の台頭: 加々美光行(1944-)、菱田雅晴(1951-)らはどこで中国研究を行ったか?
／海外事情理解と社会学研究の分離: 中国語を理解する研究者の必要性和その供給元
／アメリカにおける「比較体制研究」と実証的社会学: 竹のカーテンを超える工夫と「香港」(Tsai, 2009)

(4) 社会学の復活(1979)と改革・開放という契機: 1980年代～2000年代

- ・中嶋嶺雄(1982:256)の共同体論批判: 戦前との断絶をどう理解するか
- ・日中社会学会(1980-)の誕生と日本社会学者訪中団(1979, 1982, 1987, 1989): 重要な役割を果たす福武(1977=1986:43-64)、青井和夫(1920-2011)(根橋, 2013)と費孝通(1910-2005)、陸学芸(1933-2013)
- ・富永健一(1931-2019)の南開大学招聘(1984)とそのインパクト(富永, 2011:209-241): 「近代化」という新たな接合剤の発見



<p>関信平(南開大学教授、 中国社会学会副会長)</p> 	<p>周晓虹(南京大学教授、 長江学者)</p> 	<p>張文宏(上海大学教授、 中国社会学会副会長)</p> 
<p>胡荣(アモイ大学教授、 関江学者)</p> 	<p>于顯洋(中国人民大學 教授)</p> 	<p>李文(中国社会科学院垂太 研究所副研究員)</p> 

- ・宇野重昭・鶴見和子らによる内発的発展論＝小城镇研究:「オールタナティブとしての中国」と共同研究の進展
- ・若林敬子(1944-2014)の人口研究:中国の研究動向に寄り添うということ
- ・中国を主なフィールドにする社会学者の誕生:佐々木衛(1948-)、根橋正一(1950-)、中村則弘(1957-)らの知的営為
- ・中国社会研究の「拠点」となる筑波大学:駒井洋(1940-)という特異な存在
- ・連字符社会学から中国にアプローチする:石原邦雄(1944-)、萬成 博(1925-)、細谷 昂(1934-)、高橋明善(1934-)らの業績をどう評価するか
- ／中国の変化が引き起こす関心の喚起と研究環境の変化
- ／第二の中国社会研究ブームと中国研究との「微妙な接点」



(5) 中国のプレゼンスの増大と現在:2010年代～

- ・中国の大国化、中国研究の肥大:細分化傾向と多様な研究者の供給源
- ・日本の中国社会学研究をけん引しているのは誰か?中国研究の「エスニックビジネス化」
- ・中国社会学の「走出去」:英語圏との直接的な結びつきと中国系研究者のプレゼンスの伸長
- ・ビッグデータ時代の中国:データ大国は理論大国となりうるか?(園田, 2018)



(6) まとめ:日本における社会学と中国研究

- ・日本の社会学的中国研究は、中国でのデータの採取可能性に決定的に依存する
- ・中国への社会学的関心は、日本国内における中国への関心の高低に大きく左右される
- ・中国理解のツールとしての社会学は、戦時下の動員体制にあってたまたま発見されたが、現在もこれを「計画的に生産する」システムは出来上がっていない
- ・中国研究における他領域(政治、経済、哲学・思想など)との対話可能性や意欲はさほど高くなく、特定の 이슈(ジェンダー、不平等、未婚化・高齢化など)を持たないと、中国への興味・関心は抱かれにくい

引用文献

- 今井隆太, 2015, 「総合社会学再考—福武直の1940年代中国農村調査旅行—」『国際経営・文化研究』19(1), 15-30.
- 尾高邦雄, 1944, 『海南島黎族の経済組織』海南海軍特務部(後に一部が著作集=1995『第一巻 職業社会学』夢窓庵に収録).
- 新明正道, 1954, 『社会学史概説』岩波書店.
- 園田茂人, 1993, 「フィールドとしてのアジア」溝口雄三他編『アジアから考える 第一巻 交錯するアジア』東京大学出版会, 13-32 ページ.
- 園田茂人, 2018, 「データのアーカイブ化とアジア研究」『アジア研究』第64巻第2号, 39-46 ページ.
- 富永健一, 2004, 『戦後日本の社会学:一つの同時代学史』東京大学出版会.
- 富永健一, 2011, 『社会学 わが生涯』ミネルヴァ書房.
- 中嶋嶺雄, 1982, 『中国:歴史・社会・国際関係』中公新書.
- 根橋正一, 2013, 「青井和夫先生と中国研究」『流通経済大学 社会学部論叢』第23巻第2号, 181-192 ページ.
- 福武直, 1976, 『福武直著作集 別巻 社会学四十年』東京大学出版会.
- 福武直, 1977, 「古い中国と新しい中国—33年目の印象—」『世界』3月号(のちに著作集=1986『補巻 社会学四十年以後 年譜・著作目録』東京大学出版会に収録)
- 星明, 2015, 「社会学にみる日本と中国の関係について 清朝末期から民国末期までを中心に」『佛教学社会学部論集』第60号, 1-18 ページ.
- Tsai, Wen-hui, 2009, "China Studies and American Sociology: A Quantitative Account of the Growth of Research on China in American Sociology, 1950-2008," *American Journal of Chinese Studies*, Vol. 16: 69-81.

中国社会分析の関連文献(時系列)

- 清水盛光, 1939, 『支那社会の研究 社会学的考察』岩波書店.
清水盛光, 1942, 『支那家族の構造』岩波書店.
牧野巽, 1944, 『支那家族研究』生活社(後に著作集=1980『第一・二巻 中国家族研究 上・下』お茶の水書房に収録)
福武直, 1946, 『中国農村社会の構造』大雅堂(後に著作集=1986『第九巻 中国農村社会の構造』東京大学出版会に収録).
清水盛光, 1949, 『中国族産制度攷』岩波書店.
牧野巽, 1949, 『近世中国宗族研究』日光書院(後に著作集=1980『第三巻 近世中国宗族研究』お茶の水書房に収録).
清水盛光, 1951, 『中国郷村社会論』岩波書店.
林恵海, 1953/56, 『中支江南農村社会制度研究』上巻/下巻 有斐閣.
若林敬子, 1989, 『中国の人口問題』東京大学出版会.
佐々木衛, 1993, 『中国民衆の社会と秩序』東方書店.
中村則弘, 1994, 『中国社会主义解体の人的基礎 人民公社の崩壊と営利階級の形成』国際書院.
青井和夫編, 1996, 『中国の産業化と地域生活』東京大学出版会.
瀬地山角, 1996, 『東アジアの家父長制』勁草書房.
萬成博・丘海雄, 1997, 『現代中国国有企業』白桃書房.
細谷昂他, 1997, 『沸騰する中国農村』御茶の水書房.
萬成博, 1999, 『現代中国国有企業Ⅱ』白桃書房.
根橋正一, 1999, 『上海—開放性と公共性』流通経済大学出版会.
石原邦雄編, 2004, 『現代中国家族の変容と適応戦略』ナカニシヤ出版.
細谷昂他, 2005, 『再訪・沸騰する中国農村』御茶の水書房.
園田茂人, 2008, 『不平等国家 中国』中公新書.
大橋史恵, 2011, 『現代中国の移住家事労働者』お茶の水書房.
佐々木衛, 2012, 『現代中国社会の基層構造』東方書店.
李研焱, 2012, 『中国の市民社会 動き出す草の根 NGO』岩波書店.
鍾家新, 2016, 『社会凝集力の日中比較社会学 祖国・伝統・言語・権威』ミネルヴァ書房.
小浜正子, 2020, 『一人っ子政策と中国社会』京都大学学術出版会.